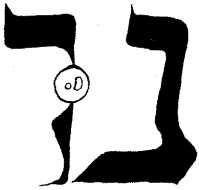
震災後の子どもたち(2)

それでも元気だよ！



稲岡　康好

三学期の始業式にお餅をたくさんたべたのか、少し太って大きくなった子ども。よくしゃべる。お年玉の事、旅行に行った事、ランドセルを買ってもらった、机が来た。話す内容は大人も負けそう。元気いっぱい園庭を竹馬行進。

地震発生の一月十七日、午前五時四十六分。子どもたちはまだ眠っていただろう。

裏六甲にある我が家から兵庫区にある幼稚園まで南へ南へと歩く。子どもたちは無事だろうか？　幼稚園は崩壊していないだろうか？

兵庫区は大きな被害である。あちらこちらから煙が上がっている。

幼稚園に近づくに従って、傾いた家、崩れた石垣、割れた道路。全壊、半壊の家、マン

ションの壁の一面がふっとんで一階から五階まで部屋の中がまる見え。布団が垂れ下がっている。新開地の交差点にある三菱銀行が無残にくずれ落ちている。銀行の裏にたしか陽子ちゃんの家があったはずだ。

幼稚園に到着する。外観はどこも壊れていない。玄関のガラスが割れている。職員室、保育室、他の部屋の戸棚も機器もまるで風に煽られたように散らばっている。

正門も通用門もこじ開けられ、近隣の方々が避難している。園庭は乗用車でいっぱい。主任教諭が出勤して来た。自転車で園区内を廻る。ひどい、あまりもにひどい状況。軒なみ将棋倒しの家。公園に、小学校に、中学校にと少しずつ子どもの様子が分かる。良かった。怪我をした子どもは今のところ居なかった。しかし、壊れたマンションや傾いた家々。「幼稚園からのお知らせ」を貼って廻る。貼り紙を読んだ保護者が次々と幼稚園に来る。電話が通じないので歩いて、自転車で、来る。

二月十日(金)　一時登園日。二十六名の園児がやって来た。久し振りに正門に立って園児を迎える嬉しさ。お母さんと手をつないで、自転車にのって……。「お早ようございます」「先生……」「こわかったね」等々。

しかし元気一杯な顔を見て安心する。

避難の方々や駐車場になって狭い園庭でそれでも子どもたちは逞しく遊ぶ。サッカー、なわとび、鬼ごっこ、固定遊具。ふっと耳に入った会話。「ぼくんとこ、みどり紙やで」「ぼくのとこは赤やってん」。震災で壊れた家の程度を行政が色別の紙を貼って示してい

る。その事が話題になっているのだ。「赤やってん」と言った子どもの少し淋しそうな、しょんぼりとした表情。

地震が起こるまでは元気で明るい女の子だった久美ちゃん。何だかとても不安定で無口、しきりに先生のあとを追う。久美ちゃんのマンションは全壊。避難所でもお母さんから離れられない。

二月十三日(月)　本格的に保育再開。家に居ると片時もお母さんから離れないまきちゃん。指吸いがはじまった、でも幼稚園が再開されて指吸いが止まったとお母さんは喜ばれた。

電話で友達とお母さんが話をしておられた。安否を気遣っての話は長くなる。話の中で、エッ!! と声を出した、とたん遊んでいたおもちゃを放り出してお母さんの腰にしがみついた敏君。梨央ちゃんのマンションはみどり色の紙が貼られている、安全なしるしなのにどうしても中に入りたがらない。幼稚園の避難所に居る。「お母さん、前みたいにお化粧してよ、今はきたない顔をしてる」と言うんです、とお母さんは訴えられた。

おとなしいけれどしっかりしている真奈ちゃん。神戸を後に広島の因島に行ってしまった。マンションは無事だったのに。神戸から車で西へ西へ。真奈ちゃんは車の中で一言も話さない。何も食べない、赤ちゃんの弟と二人しっかりお母さんにしがみついたままだったとか。姫路あたりを過ぎた頃、「いえこわれてえへん」とポツリと言ったとお母さんが話された。修了式には兵庫幼稚園に帰って来ると言っていたのに。「神戸は怖い、もう帰

らへん」と言ってとうとう帰って来なかった。

新学期が始まって子どもたちの様子に地震の怯えは感じられない。

女児が数人段ボールで作った家に入って遊んでいる。男児たちがその家を大きくゆすって「地震ですよ、あぶないですから早くにげて下さい」「ワーワーキャーキャー、お母さん懐中電気つけなくちゃ」「まっくらよ、手をつないで逃げましょう」、鬼ごっこのように楽しそうに遊んでいる。何度も段ボールの家へ入ったり出たり。保育者は子どもたちに震災後遺症があるのではないかと、地震と言うことばを口にする事を恐れていた。子どもたちは環境に順応するのが早い、少し壊れた園舎の亀裂に竹や棒を差し込んで構成したり、小さいボールを投げ込んだりして遊びを作り出している。今、私の周囲の子どもたちは地震など忘れたかのように、あの日などなかったかのように、元気に遊んでいる。

（神戸市立丸山ひばり幼稚園）